

◎『夜は昔の』山田真砂年

詩は心のゆらぎ、きらめき

昭和二十四年生まれ。令和二年「稲」創刊主宰。

「俳句は言葉ばかりが先走らず、実感を大事に詠みたい」「心のゆらぎ、きらめき」を表現したものが俳句。「身の丈にあった言葉で表現しよう」と述べる作者の第三句集。

桐の花さらさら乾く肌はだえかな

波音を幾重かさねて雛納

かさぶたのごとき砂丘や梅雨の蝶

吾が影の一処きらめく霜柱

牛蛙まぶたの重きこゑのする

掲句は見かける題材を独自なゆらぎ、きらめきに詠み、読み手に安心感を与えてくれる。

句集の特色の一つは、ご母堂を率直に詠まれた句がいくつかある事だろう。

世をまるく生きて気鬱や八重桜

菫咲く喇叭飲みして富士の水

虫の夜の四面楚歌なる母なりし

遠くへ行く母、濁世に生きる子。情を入れない突き放した「気鬱」「喇叭飲み」「四面楚歌」の冷静な語句がやりきれないまでの孤独を読み手に感じさせる。

（角川書店 令和七年八月二十五日刊）